

2020年5月31日 聖霊降臨の主日・説教要約

司教 ミカエル松浦悟郎

教会は一年の典礼を通して救いの出来事を記念します。その中心は、クリスマスと復活祭です。しかし、実は、今日祝う聖霊降臨は同じようにとても大切な記念日なのです。聖霊降臨は、神の側からの救いの業の決定的な出来事だからです。

ちなみに、神学校では聖霊降臨後、三日間は授業がなく休みになるほどでした。

第一朗読の使徒言行録では、「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」と聖霊降臨の出来事を記しています。

この場面を聞くと、私はパスカルの回心を思い出します。パスカルはご存じのように、フランスの数学者、思想家ですが、彼が亡くなった後、彼の胴衣(肌着)の襟に縫い付けてあった羊皮紙に自筆のメモが発見されました。そこには彼の決定的回心の体験が書かれてありました。まず、「1654年11月23日、月曜日、…夜十時半頃から十二時頃まで」と日付が書かれていましたが、それは単なる日付でないのです。ヨハネとアンデレがはじめてイエスに会った時、「午後4時ころであった」(ヨハネ1:39)と書き記したのと同じで、自分の人生を決定的に変えた「永遠の時」ともいべき特別な記憶なのです。私たちも、自分の人生の意味を変える決定的出来事があったとしたら、どう表現したら良いか考えてみるのもいいでしょうね。

パスカルは、まず太文字で「火」と書き、その後で聖書を引用し、続いて自分の思いを書き記します。はじめは、「確実、確実、直観、よろこび、平和、イエス・キリストの神」と。その後、再び短い聖書の引用をした後、「よろこび、よろこび、よろこび、よろこびの涙…」と続いていくのです。本当に神を信じることができた、神と出会った、神の深いはからいに触れた、などの体験は、表現できないことだと思います。ちなみに、パスカルは、生きている時にはこの体験を誰にも話しませんでした。生涯秘密にしていたことが、かえってこの体験が私たちにも伝わってくるようです。これは、パスカルの聖霊降臨の体験だったのです。

このように、私たち一人一人にもイエスと出会う体験、それはすべて固有な聖霊降臨と言えるのです。もちろん、パスカルのように一瞬の出来事として体験する人もいれば、長い人生の中で体験の中に少しずつ染みとおっていくように体験していく場合もあります。ちなみに私は後者の方ですが。

今日の第一朗読「使徒言行録」によれば、使徒たちは一つの心で祈っていたと記されています。使徒たちは、イエスの「聖霊を待ち望みなさい」との言葉を信じて祈っていたのでしょう。そして、その弟子たちの上に聖霊が注がれたのです。すなわち、聖霊は共同体に注がれ教会が誕生したのです。その意味で、今日は教会の誕生日なのです。今は教会を通して働く「聖霊の時代」と言えるのです。ただ、その構成メンバーは弱さを持つ人間です。時代の波に翻弄されたり、共同体としても間違えたりすることもあります。では、聖霊に導かれた教会とはどういう意味でしょ

うか。それは、教会をちょうど振り子のように考えてみたら良いと思います。確かに、振り子は条件によって右へ左へと大きく揺れます。しかし、どれほど揺れても中心となる基点につながっているのです。切れてしまわないで、中心に戻る力が働きます。その基点とはキリストです。教会が時代の波に揺れて大きく振れてしまったとき、中心であるキリスト、すなわち福音に照らされて回心という形で中心に戻る力が働くのです。そして、振り子は常に揺れながらも、前に進んでいくのです。聖霊はまさに教会を神の国の実現のために常にキリストに結び合わせながら前に推し進めていきます。不完全さを持つ教会であっても、聖霊はその教会を通して神の国のしるしになり、道具となるように導いて下さっていることを信じます。

もう一つ重要なことは、聖霊は教会共同体に対して働くだけでなく、その共同体につながっている一人一人に対しても働くのです。聖霊降臨の時に、舌のような形をした聖霊が一人一人の上へ下ったとあるのはそのことを表しています。私たちは弱く足りない者であっても、その私たちを通してキリストへの信仰が伝えられてきたのです。パウロが述べているように、教会はキリストの「からだ」の部分から成り立っているのです。からだの目立つところも目立たないところもどれもかけがえのない役割があり大切であるということです。実際に病気や高齢で何もできないと感じている人も世界を飛び回っている教皇も、見えないキリストを、生き方を通して表しているのです。どちらも大切でかけがえがないのです。なぜなら、神の国の実現のためには、個人の能力や力ではなく、その人を通して働かれる聖霊によって実現していくからです。このことを最も中心的に表しているのは、聖母マリアです。マリアを通して救い主が生まれるというお告げに対して「お言葉通り、この身になりますように」と受け入れました。私たちはどこかで聖霊の働きに委ねきれず、閉じている部分があるのですが、マリアは、自由意志によって完全に聖霊の働きにご自分をゆだねたのです。それゆえ、聖霊が救いの業をマリアの身に起こしたのです。

聖霊降臨を祝う今日、私たちも新たな思いで共同体として、個人として聖霊に「私をお使い下さい」と祈りましょう。

聖霊奉持布教修道女会(八事)